

古典に見る漢族女性の形象

——王昭君考——

松尾肇子

はじめに

王昭君は、楊貴妃や西施とならんで、日本でもよく知られた中国古代の美女だが、その表象には日本と中国とで違いがある。ある日の講義で、王昭君を知っていると挙手した学生にどういふ人物かを述べさせたところ、日本人学生が、匈奴に遣られた薄倅の佳人だと答えたのに対して、中国人留学生は、漢民族と少数民族との文化交流に貢献した女性だという答えで一致した。その後三枚一セットの『王昭君記念郵票冊』¹⁾を入手した。漢の宮殿で琵琶を弾ずる「昭君」と題する二〇分切手、赤の表地に白い毛皮裏のついたフード付きのマントをはおり、匈奴の王である单于と



駱駝を並べて進む「出塞」と題する五〇分切手(図一)、漢と胡の人々に囲まれて杯を手に胡服をまとい、单于と並び立つ「和親」と題する三元切手の三枚である。折本に仕立てられた冊子については後に述べるが、この記念切手の趣旨が「和親」にあることは、それがきわだつて大きい(五×九cm、他は三×五cm)ことから推察できる。また、内モンゴル自治区にある王昭君の墓とされる場所には、現在、单于と馬を並べて進む王昭君の彫像が立てられているという。

王昭君は、次章に紹介するように、いつの時代にもさまざまなジャンル²⁾の文芸作品に描かれた。清朝以前では、絵師の毛延寿に賄賂を贈らなかつたために醜く描かれ、異民族に嫁がされた悲劇の美女とされるのが常で、日本人が一



図1 「出塞」(『王昭君記念郵票冊』)

いて中原地域とは異なる文化を持ち、漢朝廷からすれば周縁に位置したはずであるが、文学世界での王昭君は漢族そのものである。現代の歴史小説『王昭君・出塞曲』⁽⁴⁾では、匈奴の王である呼韓邪单于が、王昭君がふるさと姉帰のことを語るのを聞く場面を次のように描く。

○彼女の目の光と笑顔はその誕生の地を想像させた。

東方の神秘的で昔から変らない川の流れ、あの月光の下に静かにたたずむ宮殿や町、その紅い磚や緑の瓦、亭台樓榭、古い廟や祭祀、朝廷での拝礼や儀式、それに奇妙な象形文字と玄奥な哲学教義。呼韓邪は気づいた。自分かもはや昔の若い草原の王子ではなく、もうすぐ五〇歳になるうとして、彼が慕った文化

般的に抱いている王昭君像はまさしく近代以前のそれである。

現在の中国で語られる、漢民族と異民族の融和の象徴としての王昭君像の初めは、曹禺の京劇『昭君出塞』にあるようだ。王昭君は三峡の村の出身とされる。趙毅衡が小説『昭君・毛延寿・漢元帝』の中で彼女を「方言丸出しの田舎娘」としたように、そこは紀元前の中国にお

を深く理解することは永遠にかなわないこと、しかし今、彼は彼女を抱いている——漢文化そのものである娘を。(她的目光和笑容使你想象着她的誕生之地——

東方神秘古老的河流、那一座座月光下寧靜站立的宮殿・城市、那些紅磚綠瓦、亭台樓榭、那些古廟・祭祀、朝拜・禮儀以及奇妙的象形文字和深奧的哲學教義。呼韓邪覺着自己已非當年那箇年輕的草原王子了、快五十歲了、永遠也不可能深刻地弄懂他所仰慕的文化、但現在他擁有了她——漢文化精神的女兒。)

漢民族と少数民族の融和であれ対立であれ、その構図は王昭君と单于に集約される。本稿では、近代以前の「昭君出塞」図と文芸作品における王昭君像の変化を通して、漢族女性がどのように表象されてきたのかを考察する。

一 歴史書のなかの王昭君と文学形象化の概略

王昭君のことを記した最も早い歴史書は『漢書』である。著者班固の父班彪は異民族政策に深く関わり、弟の班超は軍を率い西域都護に任ぜられた、匈奴と関わりの深い家である。『漢書』巻九「元帝紀」竟寧元年(紀元前三三)春正月、西匈奴王を攻め殺した東匈奴の王呼韓邪单于が来朝した時、元帝が下した詔に、

○呼韓邪单于是漢の恩徳を忘れず、礼儀を慕い、今また朝賀の礼を修めた。国境を確定して永遠にこれを伝え、辺境に長く戦争のないことを念願する。元号を改めて竟寧とし、单于に待詔掖庭王おしよ、閼氏とする、〔呼韓邪单于不忘恩徳、郷慕礼義、復修朝賀之礼、願保塞伝之無窮、辺垂長無兵革之事、其改元為竟寧、賜单于待詔掖庭王橋為閼氏、〕

とある。また、卷九四下「匈奴伝」には、单于に嫁した後、○王昭君は寧胡閼氏わいごあつしと号し、伊屠智牙師いとちがしという男子を一人生み、彼は右日逐王となつた、〔王昭君号寧胡閼氏、生一男伊屠智牙師、為右日逐王、〕

と記す。さらに呼韓邪单于が死去した後には、呼韓邪单于の妻のひとり大閼氏との間に生まれた雕陶莫皋てうとうもこうが復株累ふくくわい若鞮单于じやくていとなり、

○復株累单于是また王昭君を妻として二人の娘を得た。長女の云を須朴居次、次女を当于居次とした。

〔復株累单于復妻王昭君、生二女、長女云為須朴居次、小女為当于居次、〕

王昭君に関する記述は以上で尽きる。ただし、匈奴は最盛期を過ぎて分裂の様相を深め、同時にまた漢王朝も王莽（元帝の皇后王氏の一族）の篡奪に遭うという混乱を迎えることになるため、この時期以後の動きは単純ではない。

『後漢書』「南匈奴列伝」第七十九によれば、位をわが子に

譲りたい兄の輿によつて王昭君と呼韓邪单于との間に生まれた伊屠智牙師は殺され、輿の子が单于の位を継いだ。また、王昭君の娘の云は一時漢の後宮にあつたこともあり、匈奴の名族である須朴当との間に生まれた子の奢は王莽の庶腹の娘を妻とし、また娘は復株累の異母弟である烏珠留单于（夫の須朴当はその外戚である）に嫁して比を生んだ。比は伊屠智牙師が殺されたのを見、輿に猜疑心を抱き、輿の子の蒲奴に背いて南匈奴の呼韓邪单于となり、後漢に降つた。須朴居次云とその子の奢は王莽とともに死ぬことになるが、漢から見れば、王昭君の子らは匈奴を分裂させることについて功績があり、結果として王昭君は漢朝廷に大いに尽くしたと言える。これが『漢書』「元帝紀」にその名を記された理由であろう。

ここで文学作品に目を転じてみよう。王昭君を題材とする文学作品についての紹介・論考はすでに幾篇も書かれていたので、ここでは簡略に時代を追つて代表的なものを紹介するにとどめる。

後漢末から六朝時代にかけては、いくつかの伝説が生まれ記録された。『西京雜記』は絵師に賄賂を贈らなかつたために醜く描かれた話を載せ、『琴操』は皇帝の寵愛を得ることができなかった王昭君は自ら希望して单于に嫁したのであり、また呼韓邪单于の位を継承した実子との再婚を拒んで服毒自殺したとし、『後漢書』「南匈奴伝」には呼韓

邪単于の死後、漢への帰国を求めたが胡俗に従うようにとの勅命を受けて次の単于の妻となつたと記す。また西晋時代の人、石崇の楽府「王明君」はその序文に、漢の武帝の時に烏孫に嫁いだ細君と同様に、道中、馬上に琵琶を奏でさせて慰めとしたらうと述べた。これらの物語は後世の作品において王昭君の彩りに用いられることとなる。また、王昭君が自ら作つたとされる「昭君怨」や石崇の「王明君（一名王昭君）」と同題の作品が『楽府詩集』に多数収録され、また宋詞の詞牌ともなつて、歴代盛んに作られた。こうして王昭君は題詠の対象として定着した。唐朝では王昭君の故郷とされる三峽の昭君村を杜甫や白居易らが訪れ、杜甫の「詠懷古跡五首」其三の「その美貌を醜く描かれた絵によつて知られたにすぎず、その魂は月夜に乗じて帶玉を鳴らしつつ空しく故郷に帰つて来る〔図画省識春風面、環珮空掃月夜魂〕」の対句は後世への影響が大きい。盛唐では領土拡張策を背景に西域の風景をよみこんだ辺塞詩が流行したが、それらの作品中でも「昭君」「明妃」「青冢」（王昭君の墓。冬もなお青い草が生えているとされた）などが西域のイメージを高める詩語として用いられている。宋代には王安石と彼に和した歐陽脩の「明妃曲」が、琵琶のモチーフで全編を貫いて名作とされる。

一方、民間芸能や俗文学の世界でも王昭君の物語は拡大し続けた。王昭君物語が説唱されたらしいことは唐詩に見

えているが、二〇世紀になつて発見された敦煌出土の文書に、前半が失われ漢から匈奴へと向かう旅路の描写から始まる「王昭君変文」（ペリオ二五五三）がある。この物語では王昭君は彼女を楽しませようとする単于の努力にも関わらず、望郷のあまり衰弱し死んでしまう。北宋時代には、詩と曲子と各一首を組み合わせて歌い舞う転踏という芸能が流行し、漢を後に胡地へ向かう王昭君の姿が詠じられてゐる。戯曲では『元曲選』の巻頭に収録された馬致遠の「漢宮秋」が名高く、愛する王昭君を失う漢の元帝の悲しみをきわだたせてゐる。明代に入ると寺社で「昭君出塞」の戯曲が演じられたり、長篇小説に仕立てられたりして広く流布した。雪樵主人の『双鳳奇縁』では、王昭君の妹の王賽君が姉の亡き後皇后に立てられ、皇帝ともども出陣して姉の仇を討ち、また皇太子を生むという筋立てになつてゐる。

こうしたさまざまな文学作品を通して、王昭君ほどの時代にもあらゆる人々にとつて周知の人物であつた。その一方で時代ごとに少しずつ違つた側面が強調されながら再生産された。そしてそれは絵画においても同様である。

二 絵画における王昭君像

王昭君を視覚化しようとする試みは文学作品より遅れる

ようで、初唐の閻立本（？く六七三）が王昭君を描いた記録が残る。閻立本は唐の太祖李世民の朝廷に仕え、精密な人物画を描いた。吐蕃の使者に接見する太祖を描いた「歩輦圖」（模本）には、唐朝廷の官吏と通訳の間に立つ吐蕃の使者が描かれている。吐蕃は太宗の頃に唐の西方で勢力を強めたチベット族の国で、六四一年には文成公主が嫁し、閻立本の兄の閻立德には「文成公主降蕃圖」があった。閻立本が王昭君の絵を描いた背景として、和蕃公主が実際に行われたことは注意しておかねばならないだろう。閻立本の絵は現存しないが、唐の張彦遠（八一五頃？）はその著書『歴代名画記』巻二「師資・伝授・南北・時代を叙す」に時代と地方差の考証をすべきことを述べ、それにはずれたものとして閻立本のその絵を挙げる。

○閻立本は王昭君を描いたが、すでに幃帽をかぶっている。……幃帽が国朝（唐代。以下、括弧は筆者による）に始まったものであることを知らない、「閻令公

画昭君、已著幃帽、殊不知……幃帽興於国朝」

とある。「幃（帷）帽」は周囲に網や薄絹をめぐらせた帽子で、隋から唐にかけての壁画や陶俑にはこれをかぶった女性の騎馬像が見られる。閻立本の描いた王昭君も、唐朝の衣裳をまとい馬に乗る姿で描かれていたのではないかと推測される。その後、五代十国時代・南唐の陸晃にも昭君図があったが、その詳細は不明である。

北宋時代では、著名な画家李公麟（一〇四九く一一〇六）に王昭君を描いた絵があった。王庭珪の「羅疇老が家の明妃辞漢図に題す〔題羅疇老家明妃辞漢図〕」詩は、題下に、

○李伯時（伯時は公麟の字）作。王昭君がふつくらとした容姿を美しく装い飾り、立ち去りかねている姿、〔李伯時作、明妃豊容靚飾、欲去不忍之状、〕

という。この原注は、六朝・宋の范曄の『後漢書』巻八九「南匈奴列伝」の記事、

○呼韓邪が別れの宴に臨んだところ、皇帝は五人の宮女を召し出して彼に見せた。王昭君はふつくらした容姿を美しく装い飾り、漢の宮廷を明るく照らさんばかり、影を振り返り行きつ戻りつすれば、まわりの人々をおののかせるほどであった、〔呼韓邪臨辞大会、帝召五女以示之、昭君豊容靚飾、光明漢宮、顧景裴回、疎動左右、〕

を下敷きにしており、他の宮女や皇帝、呼韓邪などが描かれていた可能性もあるものの、美人画としての要素が強いように思われる。また、李公麟は北宋の最も国力充実した時代に活躍し、王安石や蘇軾らとも交遊があった。前章に紹介した王安石の「明妃曲」の「漢王の恩は浅く胡王の思いは深い、人生の楽しみは互いに心を知ることにある〔漢恩自浅胡自深、人生楽在相知心〕」の句は批判を受けた



金・宮素然「明妃出塞図巻」(右)

が、王昭君を悲劇の女性としてのみ描いてはいない。また前章に紹介したように、王昭君を美女の一人として詠じる軼蹟においても、悲劇性は王昭君に関するいくつかの要素の中のひとつであり、主要には美人であることを押し出している。人物画に秀でた李公麟は、身分や美醜などをよく描き分けた^⑩という。その絵の王昭君の美しい装いが漢宮風かあるいは匈奴の装いかは詩篇からも定かではないが、『後漢書』の場面を描いたものならば漢服をまとうていたと考えるのが妥当だろう。なお、李公麟には、『宣和画譜』巻七に記録された皇帝所蔵の一〇七作品の中に「昭君出塞図」があり、ここに述べた羅家所蔵の「昭君図」とは別の作品であろう。

宋の詩題に見える王昭君の絵については、「(王)昭君図」と称する以外では、北宋の劉子翬の「明妃出塞図」、北宋の郭祥正の「林和中家觀画卷五首」第四首「右王昭君上馬図」がある。これに加えて『南宋院画録』巻四には、南宋の四大家の一人、劉松年(生卒年不詳、ただし一一八〇〜九〇年代、孝宗光宗の頃に活躍した)に「昭君出塞」の画巻があったことを記す。また、明の王世貞(一五二六〜九〇)が南宋以前のものとして鑑定した古い王昭君の絵は、

○この絵は先導する胡騎はわずか数馬で、また琵琶を抱える漢の人がおり、後ろに続く駱駝は荷物積んでいただけ、(此図則僅導者數胡騎、亦有漢兒一以琵琶、後隨一橐駝載服裝而已。)(『弇州四部稿』統稿卷一六八「題古画王昭君図」)とあり、後に述べる金朝の「昭君出塞図」と同様の構図であると思われる。出塞図が描かれた背景には、

○南宋に特殊な事情として、各皇帝たちは、少なくとも政治的スローガンとして中原回復の意図を放棄せず、故地奪回の意気を鼓舞しつづけた。その結果、画院においても、……漢代の王嬙(王昭君、明君・明妃)にちなむ明妃出塞図、蔡琰(蔡文姬)にちなむ文姬帰漢(胡笳十八拍)図のような胡族に掠られた女性の悲



図2 金・宮素然「明妃出塞図巻」(左)(大阪市立美術館蔵)

劇など、人物画に属する主題がさかんに絵画化された¹⁸⁾、

という事情があった。こうした背景のもとに宋代の筆記でも、ことに南宋では王昭君の故事を収録するものが増える。しかし今は「出塞」の絵の実際についてこれ以上検討する材料がない。これに対して、北宋に攻め入って北中国を支配し、南宋と対峙していた女真族の国、金で「出塞図」が描かれているので、次に検討を加える。

王昭君を描いた現存する最も古い絵画は、金の宮素然が描いた「明妃出塞図巻」(図2)である¹⁹⁾。作者の宮素然については款記から鎮陽(現在の河北省石家荘市)の道教の尼とする説もある。画巻に附録する三首の詩のうちの一首は張天錫の題画詩であり、彼は金の章宗(在位一一八八〜一二〇八)、宣宗(在位一二一三〜一二二三)の時の書家である。この絵は白描で背景に山陵を描き、山道を風に逆らって進む一団が四組をなして描かれている。先導する騎馬の胡人が金国の黒地の日旗を風に翻しながら押えている。王昭君と琵琶を抱えた侍女、二人を乗せた馬二頭の轡をとる風帽をかぶった馭者は漢から従って来たと思われる。それに続く一団の前の二人のうち奥のひとり漢の使者である。

この絵における胡人たちは、毛皮の帽子、膝当てとブーツ、首周りに毛皮がついた長い上着とそれを留めるベルトの胡服をまとっている。ちなみに出土物によれば、

○当時の匈奴は、毛皮、毛織物、絹織物などを巧みに組み合わせ、彼らの生活にふさわしい服装を製作していた、……長い上衣で袖口と衿および肩の一部に毛皮で縁どられた跡、

があるという。描かれた人物の衣類は金の当時の女真族の衣服であり、王昭君もそれをまとっている。また絵の中の帽子をかぶらない男たちの、額の上に剃り残した前髪と背中長く垂らした二本の辮髪という髪型は金(つまり女真族)のものであり、王昭君も毛皮の縁取りのついた絮帽(綿入れの帽子)の下から二本の辮髪を垂らして風



元・銭選「明妃出塞図」(右)

に吹かせており、侍女が高髻ではないものの結髪して布で包んでいるのと対照的である。なお、王昭君の衣服は丹念に描かれており、内側に菊花模様の長袖の上衣を着たうえに袖口に毛皮のついた半袖の貉袖と呼ばれる上着を重ね、肩から背中をおおう雲肩を重ねている。雲肩の前すそには帽子についているのと同じ丸い玉を並べ、細長い革を長く垂らした蹀躞帯というベルトには丸いバックルがついて、全体に装飾をこらした装いである。

さて、金も宋も滅ぼして大帝國をつくったモンゴルは、蒙古族以外に色目人と呼ぶ周辺異民族を支配階級に加えた。宋の遺民である銭選(一二三九〜一三〇一)に「明妃出塞図」(図3)がある。全体の構図は宮素然の「明妃出塞図」と似ているが、背景は描かれず、風は一団の後ろからさほど強くなく吹いている。騎馬の総勢一二人のなかで王昭君はやや大きく描かれている。先頭の金國旗を持った後姿の男性は頭頂部を一部剃り残し、残りの髪を辮髪にして背中に一本垂らしているが毛皮の長袍は着ていない。王昭君は唐五代風の襦裙を着て披帛をつけ、頭髪は結い上げて櫛と笄とで飾り、左手を胸に当てて右手はだらりと下げてうつむいている。王昭君の横に馬を並べる胡人は、蒙古族に特徴的な中央部が非常に高い帽子をかぶっている。「姑姑冠」と呼ばれる蒙古の貴族女性のかぶりものである。王昭君らのうしろの二人の高位と思われる胡人は胡の仕女と似た暖帽をかぶり、さらにその後ろの三人のうち奥の人物は笠帽を、中央の一人はチンギスハンの肖像画にみられるのと同じ外が白く内は黒い貂皮の頭巾状の帽子をかぶっている。また帽子をかぶらない三人は額の前髪を剃り残り左右に辮髪を下げた頭髪を見せていて、女真族と思われる。荷物を積んだ馬の頭は虎の毛皮をかぶせてあり、元朝の旅団の様子を写している。この「明妃出塞図」は、元の当時の、蒙古族や色目人と呼ばれた非漢族をモデルとして描かれたものと言える。そして王昭君は漢の命婦が着た「深衣」でも少



図3 元・銭選「明妃出塞図」(左) (大英博物館蔵)

数民族の衣服でもなく、漢族の装いである。

元朝の題画詩を四庫全書で検索すると二四例を数えて歴代で最も多く、王昭君の絵が広く鑑賞された様子が窺われる。そのうち一六例は「昭君出塞」である。その構図は右に述べた二図と似たものようだ。例えば、

○ある日旅支度を整えて荒れた国境地帯へと嫁して行く。一頭の馬が前を行き、五頭の馬が後ろから従う。北の異民族はくつわを並べて笑いながら語り合
い、(昭君は) ふたつの袖で琵琶を抱きかかえて泣く、「一朝結束嫁荒陲、一馬
前導五馬隨。老奚並轡相笑語、双袖自抱琵琶啼。」(『刺語』卷上「昭君出塞
図」)

というのでは、王昭君は自ら琵琶を抱いているが、全体は三組に分かれた一団であることがわかる。また、李祁の「昭君出塞図」詩でも、

○馬を飼う人(異民族を指す)が旗を手に背中を見せて立ち、单子が先を急がせていることを伝える(「圜人執磨背人立、伝道单于令行急。」)

とあって、旗を持つ胡人が先導している。違いのあるところでは、陸文奎の「題昭君図卷五絶」其五には「画中有一人射雁」とあり、空を渡る雁を射ようとする胡人が描かれていたらしい。これなどは詩文や元曲の影響を受けたものである⁽²⁾。

なお王昭君の衣装について述べたものでは、元の朱碧山の作った王昭君の像について、

○琵琶を持ち、騎馬し、眉、衣のえり、刺繍、高い結髪など、いずれも精巧である、(琵琶、乗騎、眉髪、衣領、花繡、鬢鬢、種種精、)

と述べた文章が清・王士禎「香祖筆記」卷一二に引く「妮古録」にあり、これも漢の衣装をまもっていたものと思われる。

『漢宮秋』が上演されるなど、王昭君の物語は人口に膾炙したが、『漢宮秋』の昭



図4 明・仇英「明妃出塞」
(北京故宮博物院所蔵『人物故事』)

君出塞の場面は皇帝が想像して歌うだけである。匈奴の地の風景は錢運の出塞図においても捨象され、王昭君と彼女の囀む人々の姿だけが取り出されている。絵を鑑賞した元朝の漢人にとっては、辺塞の風景ではなく王昭君を連れ去る人々こそが問題だったのだろう。唐宋の絵画がどこか美人画的な趣を有していたらしいのとは異なる点である。非漢族が文献上ではなく、実体を持った支配者として彼らの生活圏に立ち現れたからであり、その点では金の時代も同じだったと思われる。

漢民族王朝である明朝では、最初に述べた『王昭君記念

郵票冊』の台紙に使われている仇英(一四九三〜一五六〇)の絵がよく知られる。「出塞」切手の台紙に用いられている「明妃出塞」(図4)は従来の構図とちがって険しい山すそを巡る川を胡人が先導して渡っている。「珊瑚網」巻四六「仇壑賦彩」注には「昭君黒河を渡る(昭君渡黒河)」という。先導する胡人たちがうしろの王昭君一行を振り返っているのは、旅路の困難を強調するためであろうか。後方には駱駝や胡人が見える。三組に分かれる点は従来の出塞図と同じだが、正方形の画面に納めるため構図はかなり異なる。先導の中心の人物が鳥の尾羽のついた貂帽をかぶっている以外にもそれぞれに異なった帽子をかぶって胡人であることが示され、従来の出塞図における胡人の持ち物である旗のほか、碗状のもの・布袋をかけた武器・首の長い壺といった道具を手になっている。またこれまで述べた出塞図と違って王昭君は漢の服を着て一頭の駱駝が引く車に乗り、駱駝の向こうには馬に乗った漢の使者が二人付き添っている。幌から下ろされたカーテンの間には琵琶を抱え背中を見せる侍女と漢服を着ているとおぼしい王昭君の白い顔が見える。この車の型は、明・作者不詳の「文姫帰漢図巻」に描かれているのと同型である。これ以前、匈奴の地は漢の北にあるものとイメージされ、騎馬して赴く姿が画題として定着していたようなのに対して、西の砂漠地帯を旅するための駱駝に引かせた車の登場

は、明朝に特徴的である。車に乗った王昭君像が生まれた背景には、明清の漢族女性が厳しい儒教倫理に縛られ、外出することも顔を見せることもまれだったことがあるのだろう。

一方で、従来のような騎馬で出塞する絵もある。仇英には扇面の「昭君出塞図」（南京博物院蔵）もあり、そこでは髪を左右の耳のあたりに残して刺つた髪型をして旗を持つ胡人の一団が従い進み、うしろから漢の衣装をまとつて馬に乗った王昭君が右袖で口元を被い左手をおろして、さらにそれぞれ琵琶・包み・子供を抱いた二人の侍女が続く。この扇面の背景は幾重にも重なる山並みであり、騎馬する数人の胡人の姿がその間に描かれている。仇英の二作の「出塞図」は、風景を比較的丹念に描いている点が共通し、元朝以前の「昭君出塞図」に比べると明朝の絵は描写が細かく、その物語性を増していると言えよう。

満州族が支配した清朝については、それまで多数詠まれた「昭君出塞図」の題画詩を検索できなかった。康熙帝は歸化城に巡行した折に王昭君の墓を訪れて「昭君墓」の詩を詠じている。その序文の中で、

○昔、功名を成すことができなかつたり遠くに流されたりした者は、往々にして王昭君の怨みに託して詩を作り、その鬱屈した思いを詠むことでその怨みは極まり悲しみに転じたのであって、どうしてこの墓がこの

地に留まるかを知らない。（昔有不得志於功名、或身遭遷謫、往往託昭君怨而為詩、以写其抑鬱、則在当日之怨極而悲、又不知何如此塚之留茲土、）
といい、詩には、

○誠を異なる民族に示し、険しい道の向こうまで広めた、〔開誠示異族、布化越荒途。〕

と詠じている。王昭君が民族を越えてその誠意を示しえたという捉え方は、民族を越えて支配していかなければならない康熙帝の立場を映すものであるが、近代になってからの民族融合の象徴としての王昭君像と重なるものと言えなくもない。

清朝では実際の絵画も従来とは異なっている。清初の人、鄧定に「題昭君出塞図」詩があり、

○南に飛んでいく雁を射てはならぬと伝令が飛ぶ。漢にご挨拶の手紙を託したいから、〔伝呼莫射南飛雁、欲寄平安到漢家。〕

という句が評判になったという。胡地に赴いた王昭君が単于とともに狩猟に出た場面を描いたものだろう。「王昭君変文」にすでに単于が王昭君のために大規模な狩を催す場面があるが、この詩以前には「王昭君出塞図」の画題は見えない。

一方従来の画題では、福建の人で揚州に長く住んだ華僑（一六八二〜一七六二頃）に二枚の「昭君出塞図」が

ある。⁽²⁶⁾どちらにも背景はなく、画面右上に石崇の楽府「王明君」が同じ字配りで配されている。上海博物館蔵の作品は漢の馭者に引かれた馬を前にこれから出塞する王昭君の立ち姿を描き、二人の侍女が後ろに控えている。王昭君は披帛をつけた漢の衣装をまとっている。上海文物商店蔵の作品は騎馬した王昭君を描き、馬の前後に三人の胡人が付き従っている。王昭君は毛皮の長袍をまとい頭には昭君套をつけ、琵琶をかき鳴らしており、胡人は耳のよこに左右二本ずつの辮髪を垂らしている。二図は馬や供回りの人物を配することで出塞の旅であることを示し、漢と胡の衣装で場面を示しているが、美人画としての王昭君像を企図した印象は免れない。王忠祥（道光年間卒）の「王昭君像」⁽²⁷⁾ではそれはさらにはつきりし、琵琶を抱えた侍女を伴って立つ王昭君の華麗な頭飾りという毛皮の長袍といい、俳優モデルとしたと思われる。元朝の銭選の「明妃出塞図」⁽²⁸⁾が、王昭君には漢服をまとわせた上でいくつかの異民族を配してカタログ的な絵を描いたのに比べると、同じく異民族王朝といながらも満州族の髪型である辮髪⁽²⁹⁾の強制に象徴されるように、清ではより統制的な雰囲気があったこともこうした構図をとった背景にはあるのかもしれない。

以上、時代を追って、絵画における王昭君の形象をみてきた。⁽³⁰⁾『楽府詩集』巻二九「王明君」の楽府題解説に引く『琴集』には「胡笳明君別五弄」を挙げ、「辞漢、跨鞍、望

郷、奔雲、入林」の五曲があったといい、画題としては「辞漢」「望郷」もあるが、「跨鞍」に相当する「出塞図」の作例が宋になって増え、元朝では王昭君に関する他の画題を圧倒し、明朝へと続き、清朝では衰退した。その背景には、漢民族が常に周辺異民族と対峙していた歴史がある。「出塞図」という画題は、漢民族と異民族を対比する見方を背景としているものの、その際の異民族は必ずしも先行作品を引き写すのではなく多くはその時代の状況を反映している。漢民族を代表する王昭君の図像についても衣服、乗り物、しぐさ、表情などに変種がある。とりわけ衣装は単に絵画の印象の問題に止まらず、漢服を着るか胡服を着るかは王昭君の帰属を示す隠喩でもある。また出塞する王昭君を人々はどう捉えていたのか、この点で最も問題とされてきたのは貞操の所在だった。次章ではこの二点について考察する。

三 貞操の対象と衣裳に示される帰属性

王昭君の物語は、近代以前においては悲劇として読まれてきた。皇帝の一族でもないのに和蕃公主として異民族に嫁がされたこと、過酷な自然環境の異国の地に葬られたこと、複数の夫を持たざるを得なかったことなど、漢民族にとっての悲劇的要素を王昭君は持っていた。それらを取り

込みながら成立した各種の文学作品のなかで、変化に富むのは婚姻をめぐる貞操のありかたである。

まず、事実の再確認をしておきたい。「漢書」の記載によれば、王昭君は漢の元帝の寵愛を得ることなく匈奴の呼韓邪単于に嫁いだ。呼韓邪単于にはすでに多くの妻がおり、王昭君は最後の閼氏となつて一子を生んだ。呼韓邪単于の死後は、呼韓邪の子である次の単于、復株累の妻となり二女を産んだ。ここに見られる寡婦相続という婚姻の形態は漢民族にはない。そのため、その理解にはさまざまな困難と問題とが発生した。

誤解による最初の記事は『琴操』⁽³³⁾にみえる。

○昭君には「世違」という子があつた。単于が死ぬと世違が位を継いだ。そもそも胡というものは父が死ぬと母を妻にする。昭君は世違に「お前は漢か、胡か」と尋ねた。世違は「胡でありたい」と答えた。そこで昭君は葉を飲んで自殺した。「昭君有子曰世違、単于死、世違継立、凡為胡者、父死妻母、昭君問世違曰、汝為漢也、為胡也、世違曰、欲為胡耳、昭君乃吞葉自殺。」

寡婦相続は母以外の父の妻を相続するのであり、右のようなことは起こらないのだが、実際に対する無理解がこうした物語となつたのであろう。五胡十六国時代以後、例えば南朝・宋の范曄は『琴操』を参考にして『後漢書』の王昭

君の記事を書いたが、この誤伝は採用していない。

後世における王昭君の形象に大きな影響を与えた晋・石崇の楽府「王明君」には、

○父と子に凌辱され、これに対しては恥ずかしくまた驚くばかり。自殺することもまことにむずかしいので、黙ってしばらく生きていくだけ、「父子見陵辱、对之慚且驚。殺身良不易、默默以苟生。」

とある。儒教倫理としての再婚の忌避はまださほど厳しく指弾されず、漢族の間でも実態として再婚は珍しくなかつた時代であるが、父親とその子との結婚という点は一種異常な事態として同情の対象となつたのである。多くの楽府が作られたが、王昭君を非難するものはなく、悲劇の主人公として詠い上げている。

唐朝李氏は非漢族の血を引き、また国土を拡大してその領土内には多くの非漢民族を抱えていた。婚姻に関する規範は当初緩やかで、公主の再婚は頻繁に行われ、三婚することもある。再婚を忌避するようになるのは中唐以後のことである。中唐に発展した傳奇小説に牛僧孺撰とされる「周秦行記」⁽³⁴⁾という短編があり、王昭君が二人の単于の妻となつたことが揶揄されている。科挙に落第した牛氏が帰郷する道すがら、漢の文帝の母である薄太后の廟にやどり、戚夫人、王昭君、楊貴妃、潘淑妃、緑珠といった歴代の美女と宴を楽しんだ。太后は王昭君に、

○初めは呼韓邪单于に嫁ぎ、後には復株累单于に嫁いで、もとより身勝手であろう。それに、貧しい胡の幽霊になんができよう。昭君には断ることのないように、〔昭君始嫁呼韓单于、復為株累弟单于、固自用、且苦寒地胡鬼何能為、昭君幸無辞〕

と、牛氏の夜の供をするよう言いつける。この時代を境として、王昭君を薄倖の美女と見て同情を寄せるものと、貞女にあらずという非難を向けるものとが出てくる。特に明朝の儒者は激しく非難した。

○呼韓邪单于が死んで節を守ることができず、そのまま次の单于の閼氏となった。これは「淫佚」の女であつて、どうして貞節で名を顕したなどといえようか。……王達は「筆疇」のなかで王昭君が匈奴に遠く嫁いで行く途中で自殺せず、異民族の妻となつてから死んだのではあまりに遅すぎるではないかと責めているが、王昭君は死ななかつたばかりでなく二人の单于の妻となることを羞じなかつたのだ。〔呼韓邪死、又不能自守、遂復為後单于閼氏行、此乃淫佚之女、何云以節聞哉、……学士王達筆疇中常責昭君遠嫁匈奴、不死於中路、及至見脛羶而後亡、不亦晚乎、不知昭君不惟不死、且不恥為両单于妻矣、〕（明・顧起元『説略』卷九）

清朝になつてもこうした非難は続き、「昭君出塞図」を

見ても「佳人が節を失うとはまことに嘆かわしい（佳人失節尤可歎）」（清・下永誉撰『式古堂書画彙考』卷十九）題「昭君出塞図」と慨嘆することになった。こうした失節の非難に対しては、呼韓邪单于死去の後に帰国を求めたが漢の皇帝がそれを許さなかつたことを取りあげて王昭君の悲劇を強調するものがあるが、いづれにせよ王昭君の再婚は女性としてあつてはならないこととみなされた。

このように徐々に進んだ貞節重視の風潮のもと、文芸作品では事実を枉げて読者の受け入れ可能な展開を工夫した。以下に代表的な三作品を挙げる。

「王昭君変文」では、单于に嫁したのち、望郷のあまり病に伏し死去してしまふ。漢の皇帝との関係を示す部分が欠落しているが、漢の使者が訪れ青塚に祭詞を捧げて全篇を終えているところを見ると、漢の皇帝の寵愛を受けていたようではない。再婚の問題は避け、王昭君が单于の妻となつて早々に死去することで異国の地に眠る悲劇性を増したものと思われる。

『漢宮秋』では、毛延寿の妨害にもかかわらず、琵琶の音によつて皇帝は王昭君を見出し、寵愛を賜る。しかし毛延寿から絵姿を見せられた单于は王昭君を指名して和蕃公主に乞ひ、王昭君は单于に嫁がざるを得なくなる。单于とともに出塞の途中、王昭君は黒竜江が国境線であると聞き投身自殺する。单于はその亡骸を川の傍に葬り、青塚と名

づける。王昭君は皇帝の寵姫としてその生涯を国境で終え、皇帝の夢の中に帰って来るのである。

『双鳳奇縁』では、毛延寿の妨害にもかかわらず、琵琶の音によつて皇后に見出され、その推挙によつて妃となる。毛延寿の策略のために単于に嫁ぐことになるが、皇帝への貞節を守り通し、単于には白羊河に浮橋をかけてくれたら妻となると約束して大土木事業で匈奴の財政を傾かせ、一六年の歳月をかけて完成した浮橋から投身自殺し、その亡骸は漢宮へ流れ着き、皇帝皇后の列席のもと盛大な葬儀が挙行される。この小説では、王昭君は頼りない皇帝に対しても貞節を守るにとどまらず、漢のために働き、その身は漢の地に葬られることとなる。

右の三作品ではいずれも王昭君は再婚しないばかりか、元朝以後、漢の皇帝への貞節を守るストーリーへと変化する。王昭君の埋葬地点も、匈奴の領地から、国境線、漢の領域内へと変わっている。これは漢の女としての王昭君の評価の高まりに連動するものであり、死後は漢の土に還ることによつて王昭君がどちらに帰属するのかを明示し、同時に読者の心情を満足させられたと考えられる。

これらの作品においては、王昭君の衣装もまた象徴的な意味を与えられている。「王昭君変文」では巻上の最後の韻文部分に、

○到着したばかりで胡のやり方になじめず、来たばかり

りで漢の衣装をまもっています、〔乍到未閑（嫺）胡地法、初来且着漢家衣。〕

とあり、王昭君は数か月及ぶ旅をして胡地についても、漢の衣装を着て漢を懐かしんでいる。胡の衣装についてはこの韻文の前に置かれた散文の部分に、「蚕を飼わずに着る（不蚕而衣）」、「絹や麻はないので、毛を織つて服を作る（少有絲麻、織毛為服）」と紹介されている。

『漢宮秋』第三折では、「貂の毛皮をまとい、漢宮の装いをすっかり改めた（錦貂裘生改漢宮妝）」（「双調新水令」）王昭君は、見送りに来た皇帝に対して、

○このたび出発すれば、いつ再び陛下にお目にかかれましよう。私の漢での衣服を全部残してまいります、〔妾這一去、再何時得見陛下、把我漢家衣服都留下者。〕

と述べて、衣服をとどめ、皇帝に「どうして舞の衣を残して行くのじゃ〔則甚麼留下舞衣裳〕」（「殿前飲」）と嘆かせる。衣裳は皇帝が王昭君を思い出し悲しむよすがとなるものとして詠じられ、王昭君もそれを望んでいるのである。

『双鳳奇縁』の、出発に際して蕃服に着替える場面は、愁嘆場である（第四七回）。使者が運んできた蕃服を受け取る皇帝の問いに答えて、蕃使は、

○これは皇后がかぶる鼓子絨帽で、美しく刺繍し、中には珊瑚・琥珀・真珠・メノウをそれぞれ八粒、中に

冬珠一粒をはめ込んで、龍の姿に作り成しておりま
す。これは鳳凰の模様の上着で、夜明珠二四粒を使っ
ています。これは山河地理図模様のスカート。これら
は値も付けられない宝物で、皇后がこれらをまとわれ
ましたら、暗闇の中を行かれましても白日のように、
光り輝かれます。(「這是娘娘戴的鼓子絨帽一頂、錦緞
妝成、上嵌珊瑚・琥珀・珍珠・瑪瑙各八顆、中嵌冬珠
一粒、繡成龍形、這是一件鳳凰三點頭的彩服、内有夜
明珠二十四粒、這是山河地理圖裙。此俱是無値之宝、
若娘娘穿了這套衣服、在黑暗中行走如同白日、光華万
道、瑞彩千条」)

と説明する。皇帝は涙を浮かべて受け取ると、後宮に届け
させる。おりしも皇后が王昭君を訪ねていたが、王昭君は
蕃服を見ると心を切り裂かれ大声で泣き崩れる。着替えを
手伝う皇后に、王昭君は、

○朝にはまだ漢のむすめでありましたのに、にわか
に北蕃の人になつてしまいました。これより陛下には
私のことはお気に掛けませんように、(「早間還是漢朝
之女、頓時變做北蕃之人、從此君王龍心不要掛念奴
家」)

とかきくどき、皇后はその服を着て身代わりに和蕃に行こ
うと言ひ出し、止められる。

さらに、黒水河に到り、九姑廟に宿をとつたとき夢に現

れた仙女から鶴髻の仙衣を与えられる(第五二回)。鶴髻
は地面に届くほどの長さのゆつたりとしたガウンで、もと
もとは鶴など鳥の羽で作つたとされ、道教では羽衣と称
する。物語のなかでは蕃王が王昭君に触れようとするど何
万という銀針が生えてその身を守る宝物であるとともに、
王昭君が仙女の生まれ変わりであることを暗示する。それ
をまとつたまま身を投げた王昭君であるが、漢の皇帝が皇
城外の川辺に流れ着いた死体に祈ると鶴髻は消え去る。そ
して皇后が手ずから死体を清め、漢の服を着せて葬るので
ある(第六四回)。

第三章にみたように、絵画の「昭君出塞図」においても
王昭君は漢の衣服を着ていたり胡の衣服を着ていたりした
が、本章で取り上げた文学作品は、その意味するところを
言葉で説明するものと言える。「王昭君変文」や錢選の
「明妃出塞図」などの、胡地にあつても漢の衣装をまとつ
た王昭君は、身も心も漢人であり、胡地に赴く自分の運命
を承知していない。胡の衣服に着替えることは漢人として
の自分に別れを告げなければならぬ危機として認識され
る。『双鳳奇縁』で、胡服の上に鶴髻を重ねた王昭君の姿
は、漢に拒否されても胡を拒否する心情を象徴しているよ
うに思われる。

おわりに

漢民族は、紀元前の出来事である「昭君出塞」を、二千年にわたって図像としても文芸としても繰り返し再生産してきた。王昭君は、漢人と女性というふたつの特徴を持っているために表象の対象として魅力的であつたし、それが集約的に表れるのが「昭君出塞」だといえよう。漢人女性としての表象の再生産の実際は、時代や地域によって多様である。胡服を着け馬に乗り吹き付ける風に面を上げて前進する金朝の王昭君と、漢服を着け車の奥に座り運ばれていく明朝の王昭君、また胡服を着け駱駝にのり单于と談笑していく現代の王昭君とを比べれば、その相違ははなはだしく、その心情を推し量つてみたくなるというものである。

漢への望郷絶ちがたく絶命する変文の王昭君、悲嘆にくれる皇帝に対してみずからの運命を諦念したかのような『漢宮秋』の王昭君、皇帝を怨み、单于も拒否し通す『双鳳奇縁』の王昭君。これらの王昭君像も一様とは言いがたい。彼女と対照される胡人の形象は、絵画では各時代の実際の周辺異民族の姿を写し取つたものであり、文学作品からは王昭君の行く先に待つ異民族への認識や疎親の感情が透けて見える。漢人の王昭君の望むものが分からないながら大切な和蕃公主のために手立てを講じる変文の单于の懸

命な姿に恐ろしさを感じない。『漢宮秋』の蕃王は、王昭君を失つて毛延寿の計略に気づき、すぐさま漢との関係を修復するため毛延寿を差し出す賢明さを持つ。兵力で皇帝に王昭君を差し出させた『双鳳奇縁』の蕃王は、王昭君の心欲しさにその策略に落ちてしまう。

一方で、文芸作品においてごく近年まで変わらなかつたのは倫理のありかたである。貞節は、その対象が皇帝か单于かという違いはあつても、時代を越えて常に王昭君に要求されていたと言つてよいだろう。また、王昭君が漢人であるという認識を捨てないことも、どの作品にも共通する。もともと和蕃公主は至つて政治的な存在であつて漢を捨てることはできないのであるから、それは当然なのかもしれない。その意味では、漢とは何かという問いを越えて政治の枠組みに絡め取られ抜け出すことができないうのが王昭君の表象の宿命だといえるかもしれない。

注

〈1〉『王昭君記念郵票冊』天海国際郵票有限公司、一九九四年。

〈2〉近代以降では郭沫若が、皇帝に反抗し自らの意思で匈奴に嫁し、「嫁に行つても必ずしも夫に従わない」（郭沫若『写在《三箇叛逆的女性》後面』一九二六年）王昭君像を

描いた。日本でも藤水名子の小説『王昭君』では自由にあ
こがれる行動的な女性として描かれている。こうした近代
的女性解放思想を具現する女性としての描きなおしは、王
昭君に限らず、さまざまな歴史上の女性について行われて
いる。

〈3〉『93中国小説精萃』。原載『湖南文学』一九九三年第三
期。王昭君の出身については『琴操』は齊王穰の娘とする
が、三峡の姉妹という村の出身とする説が、杜甫の詩など
によって定着した。

〈4〉龐天舒著、上海古籍出版社（花非花・歴史小説系列）、
一九九九年。引用は第十章、一四六頁。作者紹介によれ
ば、著者は満族で、一九六四年生まれ。八〇年代末からは
北方少数民族の文化史と軍事史に取材した小説も発表して
いる。

〈5〉漢と東匈奴の關係が友好關係が臣従かについては歴史
家に議論がある。好並隆司『前漢政治史研究』研文出版、
二〇〇四年、参照。また、澤田勲『匈奴——古代遊牧国家
の興亡』（東方書店、一九九六年）に掲載の系図は理解に
便利である。

〈6〉唐以前については黒川洋一「王昭君の伝説と文学」に
整理されており、元曲『漢宮秋』については久保天隨の紹
介にはじまり波多野太郎、吉川幸次郎両博士の論考が比較
的早い。また川口久雄「敦煌変文の素材と日本文学——王
昭君変文と我が国における王昭君説話」（『金沢大学法文学
部論集』一一号）は、日本の古典文学における王昭君の受

容についても詳しい。

〈7〉晋の文帝の本名「昭」を避けて「明君」「明妃」と呼
ぶようになった。

〈8〉王建の「観蛮妓」詩に「欲説昭君斂翠蛾、清声委曲怨
于歌」とあり、吉師老の「看蜀女転昭君妾」という詩題か
ら見ると、四川の女性が語って歩いたようだ。

〈9〉秦觀「調笑令十首並詩」、『樂府雅詞』卷上「調笑集
句」のいずれも、美女を題詠したなかに、王昭君を取り上
げる。

〈10〉『西湖遊覽志余』卷二〇「熙朝樂事」には「立春之
儀、附郭尚臬輪年通弁、……選集優人戲子小妓裝扮社夥、
如昭君出塞、學士登瀛、張仙打彈、西施採蓮之類、種種姿
態競巧爭華、教習數日、謂之演春、」として演目の最初に
挙げられている。

〈11〉『旧唐書』卷四五「輿服志」には、劉子玄の言葉とし
て、「闔立本画昭君入匈奴、而婦人有著帷帽者、……帷帽
創於隋代、非漢宮所作、」とあり、帷帽の始めを隋とする。

〈12〉周錫保『中国古代服飾史』中国戲劇出版社、一九八四
年、二一三頁。高春明『中国服飾名物考』上海文化出版
社、二〇〇一年、図版一二頁。

〈13〉明の汪何玉に「吳江史明古家藏陸冕昭君図」の詩があ
る。

〈14〉韓駒には「題李伯時画昭君図」詩があり、王庭珪が見
たのと同じものであれば、「昭君図」という名称によって
美人画である可能性を示唆していると思われる。日本では

王昭君の物語はよく知られていたにもかかわらず「昭君図」しか描かれていないようだ。江戸時代の桃源齋栄舟の「見立王昭君図」、久隈守景「王昭君図」、明治時代の鶴沢探真「王昭君」、いずれも美人画としての王昭君図である。

〔15〕内山精也「王安石『明妃曲』考——北宋中期士大夫の意識形態をめぐって」『橄欖』第五号・第六号、一九九三年・一九九五年が、この作品の先行作品や制作の背景、後世の評価などを詳細に検討している。

〔16〕『宣和画譜』巻七「尤工人物能分别状貌、……非若世俗画工混為一律貴賤妍醜止以肥紅瘦黑分之大抵」。

〔17〕南宋の裘萬頃、柴隨亨、梅致和の詩題。また李流謙の「鄴守以石刻屈平・昭君像云々」詩には、同郷の屈原と王昭君とを合わせて清廉な人物として石像を刻んで顕彰しようとしたことが見えている。

〔18〕『世界美術大全集 東洋編』第六卷「南宋・金」小学館、二〇〇〇年、嶋田英誠執筆「南宋宮廷の絵画」の「前期の画院絵画」の項。

〔19〕金の絵画は現存作品が少なく、また日本に伝存するという点からも、研究も写真の掲載も多い。金の張瑠の「文姫帰漢図」が非常によく似た構図であって、両者には根本があることが想定されるが、ここでは取り扱わない。また、この両者に関する考察として、衣若芬「『出塞』或「帰漢」——王昭君与蔡文姬圖像的重疊与交错」（『婦研縱横』七四期、二〇〇五年四月所収）があり、図版も多く収

載する。

〔20〕『東洋服装史論攷 古代編』文化出版社、一九七九年。

〔21〕『陶器が語る来世の理想郷、中国古代の暮らしと夢——建築・人・動物』展覧会図録105解説、愛知県陶磁資料館など、二〇〇五年。

〔22〕『元曲選』は「破幽夢孤雁漢宮秋」として収録している。唐の辺塞詩において雁と王昭君とが結びつけられた。

〔23〕『王昭君記念郵票冊』の台紙に用いられているのはいずれも仇英の彩色画で、王昭君の物語のさまざまな場面を描いている。「昭君」切手の台紙は「漢宮春曉図」という宮女たちを描いた絵巻の一部で、毛延寿が王昭君を描き、目の下に痣を入れようとしている場面を使用している。末尾には花草模様の袋にはいった琵琶を抱え、宋以後に女性の衣装に加わった「背子」を着、「昭君套」と呼ばれるようになる毛皮の頭飾りをつけて毛皮の敷物の上に立つ王昭君の姿を描いた「昭君琵琶図」が印刷されている。

〔24〕『漢宮秋』で王昭君が黒竜江に投身自殺するイメージを意識するものであろう。元の耶律楚材の「過青塚次買搏霄韻」詩にも「朝雲雁唳天山外、殘日猿悲黑水濱」とあり、黒水のイメージが定着していった様子が窺われる。

〔25〕大和文華館所蔵、「大和文華館所蔵品図版目録8 絵画・書蹟 中国・朝鮮篇」大和文華館、一九八八年、一八・一九頁、一六世紀とする。

〔26〕作者不詳の「明妃出塞図」（明一六世紀、作者不詳、前掲『大和文華館所蔵品図版目録8 絵画・書蹟 中国・朝

鮮篇』二二・二三頁。『中国絵画総合図録』では清とす(る)でも王昭君は駱駝に引かせた車に乗っている。ただし、車は丸い天蓋を有し、幌を張り出した前部は無く、一七四・六cmという長巻で多数の人物が描かれているが、漢人の衣装を着た者はいない。騎馬して先頭を行く一群の後ろから、駱駝二頭に引かせた車に乗った単于が続いており、胡人の一部は鎧を身につけ、侍女たちはみな姑姑冠をつけている。衣若芬氏は前掲論文で、昭君の一行は画面右向きに、蔡文姬の一行は左向きに描かれると指摘しており、琵琶を抱く侍女を伴うものの、左に向かって進む本作は『文姫帰漢図』である可能性もある。

〔27〕 前掲の衣若芬論文では「文姫帰漢図」とする。段書安編『中国古代書画図目』（文物出版社、二〇〇一年）は琵琶を配していることから王昭君と認定したものかと思われる。

〔28〕 鄭方坤『全閩詩話』巻六「鄧定」。

〔29〕 前掲『中国古代書画図目』第五冊・第一二冊所収。

〔30〕 安徽省博物館蔵。前掲『中国古代書画図目』第一二冊所収。

〔31〕 絵画ではなく文学作品と密接に結びついた挿絵もしくはイラストの古いものでは「王昭君変文」があった。現存する部分に「上巻立鋪畢、此入下巻」と記されているように、本来画卷を見せて語られたものである。残念ながら画卷は現存しないのでその絵を検討することはできない。明代以後になれば小説の挿絵があり、衣若芬氏によれば、それらは絵画作品を踏まえ、さらに芝居の衣装を取り込み、

文学作品の内容にあわせて演劇的效果を生む絵柄となったという。前掲の衣若芬「出塞」或「帰漢」を参照された。ここでは、明の『王昭君出塞和戎記』（天一出版社、中国戯劇研究資料第一輯）の挿絵では、王昭君の身替りとなつて嫁す蕭善音は漢服をまとい、王昭君自身の出塞は芝居の衣装ではあるが胡服であることを指摘しておきたい。

〔32〕 こうした婚姻のあり方を寡婦相統と呼ぶのかレヴィレートなのか（和田正平「性と結婚の民俗学」同朋舎出版、一九八八年）、あるいは嫂婚制（澤田勲「匈奴——古代遊牧国家の興亡」東方書店、一九九六年）と呼ぶのか、筆者には判断できない。ひとまず寡婦相統と呼ぶことにする。なお、レヴィレートは「古くから漢民族が異民族の風習として最も忌避してきた」ものであるという指摘はすでになされている（関西中国女性史研究会編『中国女性史入門』人文書院、二〇〇五年）。

〔33〕 晋・相孔衍の撰。佚書。ここには劉義慶『世説新語』「賢媛篇」王昭君の条の劉孝標の注に引かれた部分を引用した。

〔34〕 『太平広記』巻四八九所収。また後唐の清泰二年（九三五）の年号が記載された敦煌文書（ペリオド三七四一）もある。

〔35〕 文中、王昭君とならんで、楊貴妃が玄宗とその息子の妻であったことも暗に触れられているが、同時代の唐室に對しては遠慮している。

〔36〕 前掲『中国古代服飾史』二二三頁。